

「朝日新聞」の社説

因みに、朝日新聞は、昭和41年3月4日、異例とも言ふべき「石井方式を考える」といふ社説を掲げました。長いので一部を削ってここにそれを紹介したいと思ひます。

「石井方式」を考える

自民党では、最近、党内の文教委員会内に「国語問題に関する小委員会」(委員長森川たま議員)を設けた。委員会はすでに2回開かれ、年内までには、基本的な方針をうち出したいといっている。政党がこのような問題に取り組むことは結構なことだ。

国字国語問題は、この20年間、大きな変革の波をかぶった。人によって、それを混乱といい、百花齊放というが、ともあれ、20年間の実績と体験とは、この問題にいくつかのルールをしいたことはたしかである。そして、それらの一つに、遠い遠い将来は別として、われわれの時代においては、やはり「漢字カナまじりの文」が原則であるということ、それを現代の機能化された社会に、どのように生かし、かつ適合化させるか、ということが大きく問題として浮びあがって来ている。

基本的な漢字問題、新カナづかい採用から、ローマ字、横書き、分かち書き、カナモジなどのさまざまな試みは、いわば、そのための努力といってよい。

しかし、一方においては、それらの結果として、若い人たちの国語力の低下が叫ばれている。『やがて漱石や鷗外が読めなくなる。いや、現に読めなくなりつつある』との声はしばしば耳にする。新装の各種文学全集が、原文を新カナ、あるいは、よりわかりやすい言葉づかいや、ルビつきなどにしているのは、現代が、国語問題の点からみる時、過渡時代にあることを物語っている。

国字国語の能率化、簡素化と、伝統的な文化遺産としてのそれとの間に、いかにして調和と^{きんこう}均衡を保つか、今日の国語問題はそこに焦点をしぼることができよう。

そして、いわゆる“石井方式”は、この問題解決へ、一つの考える素材を提供しているように思われる。

“石井方式”のねらい

“石井方式”というのは、石井勲氏(東京・四谷第七小学校)によって行われている一つの実験であるが、すでに13年間の実績を持つ。現にこの方式を採用しているところに、新潟県亀田東校、熱海桃山校、三島市東校、佐賀市西与賀校、旭川大成校などがある。

この方式は、よく「漢字を教える教育」のようにいわれているが、そうではない。「漢字で教える教育」なのである。その結果として低学年の子供たちが、意外に早く、多くの漢字を覚えるということなのであ

る。

文部省の各学年配当学習漢字数は、1年46字、2年105字、3年187字、4年205字、5年194字、6年144字、計881字になっているが、石井方式によると、1、2年生で、3百字から5百字ぐらいは覚えるという結果が出ている。

教育の原理は、こうである。子供たちに、特別な幼児の言葉で教えない。はじめっから大人の言葉(正書法)を持ち込んで行く。もちろん、それらは抽象的な意味を持つ漢字でなく、具体的なもの、子供たちの身近にある言葉である。たとえば、学校。この字は校門の出入りに毎日見ている漢字である。たとえば、先生。これは毎日接している人である。

子供たちの、このような日常的な言葉は、平かなで読ませないで、はじめっから漢字で読ませる。しかし、書き方は教えない。読ませるだけである。つまり漢字になじませるのである。すると、子供たちに漢字に対するイメージが出て来る。それを何回かくりかえしていると、子供たちの方が、書きたい、覚えたいという意欲を持つ。その時、漢字の基礎原型となるような木、山というような字からまず教えていく。

4歳から9歳ぐらいまでの幼児にとって、見るもの、聞くものが驚異である。耳で聞き、話すだけなら、この年ごろは3つの外国語を覚えることも可能だと、ある学者はいつている。つまり、視覚、聴覚、味覚が、しなやかで、かつ鋭い。3つの感覚に関する限り、成人になって

からの原型は、この時期に作られるともいわれている。

石井方式は、この鋭い視覚に漢字の教育を適用したということもでき、その意味では一種の“感性教育”ともいえよう。しかも、このごろの子供たちは、茶の間でテレビに親しむ。テレビには、大人の言葉がそのまま出て来る。つまり、子供は、教室を除いては正書法で生活をしている。

はつらつたる好奇心と関心を持つこの時期に漢字を覚えさせ、学習負担の急速にふえて来る高学年は、漢字の学習から解放させようということにもなる。(以下省略)

以上で十分に御理解頂けたと思ひますが、実に堂々たる論説で、石井方式が今後の国語教育改善のために好いヒントを提供してゐること、これを素材に今こそ子供たちの国語力を伸ばす教育を考へるべきことを世に訴へたものでした。

この朝日新聞社の社説は、大層私を勇気づけてくれました。多くの学校教育者たちは依然として石井方式を無視し続けましたが、この社説を頭に思ひ浮べますと「自分には強い支持者があるんだ」といふ思ひがして勇気づけられたものです。今もかうしてこの道に励んでみられるのは、このやうな強力な理解者がゐてくれたお蔭だと思ひます。